

学友现代日语 Ⅲ

日本国际学友会日本語学校 编



あ い う
か き く
さ し す



北 京 出 版 社



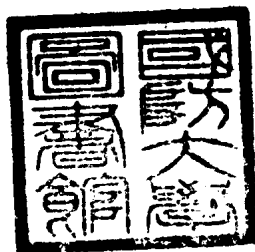
2 031 2207 6

日本国际学友会日本語学校編

学友现代日语

第三册

张生林 孟宪凡 等编译



北京出版社

日本国际学友会日语学校编

学友现代日语

第三册

张生林 孟宪凡 等编译

*

北京出版社出版

(北京北三环中路6号)

新华书店北京发行所发行

北京第二新华印刷厂印刷

*

850×1168毫米 32开本 9印张 223,000字

1984年6月第1版 1987年6月第2次印刷

印数 16,301—23,000

ISBN 7-200-00213-5/H·19

书号: 7071·958 定价: 2.10元

60/3/4/064

前 言

本书是根据日本国际学友会日本語学校出版的《日本語读本》编译的。原书由该校教授铃本忍（已故）和阪田雪子等编著。共四册。

国际学友会日本語学校设在东京，是专为外国留学生进修日语创办的，已有三十余年的历史。外国留学生进入该校学习这套课本，可以达到进入日本大学听课的水平。《日本語读本》初版于1955年发行，至1980年12月，已经修订再版九次，在日本国内外流传很广，是一套较好的日语教材。

为满足国内广大读者的需要，我们编译了这套书，也分四册出版。编译时保留了原书的课文及练习等内容，为方便我国读者学习，第一、二册每课增加了语法、句型、词汇解释等项，书后还附了“课文参考译文”和“练习答案”等。

这本是全书的第三册，共三十二课。包括：小说、戏曲、日本情况介绍、科普读物等。通过这些课文，可以为日语学习打下较为坚实的基础。原书第十七课、第二十七课是新闻资料，因已失去时间性，我们未用，另选了两课。

本书每课包括：正文、问题、注释及参考译文等项。“问题”可作为课堂练习或课外作业。人名、地名、文言、方言、惯用词组、惯用型等难于理解的地方，均在“注释”中做了解释。因为第一、二册已经系统讲过日语基础语法，对基础语法中讲过的问题，本册不再加注。“参考译文”是为自修的读者便于理解原文翻译的，没有做过多的文字修饰，仅供参考。

这套书可供业余大学作为日语教材，如每周上课六小时，全

书约可用三年。第三册对学过日语基础语法，有一定日语基础的读者较为适用。

第三册由张生林、孟宪凡、吕昶、李琼、叶幼华、梁达礼、丁兆伟、戴辅中等编译，全书由张生林校订。由于我们水平有限，加以时间仓促，在编译方面一定会有不少缺点和错误，恳请读者批评指正。

编译者

1984年6月

目 次

一	雨ニモマケズ……………	みや 宮	ざわ 沢	けん 賢	じ 治	1
二	野バラ……………	お 小	がわ 川	み 未	めい 明	6
三	日本と外国との交通……………					15
四	ことばのいろいろ……………					22
五	りようかん 良寛さま……………	そう 相	ま 馬	ぎよ 御	ふう 風	28
六	科学と人の心……………	はつ 服	とり 部	しず 静	お 夫	42
七	いろいろな書式……………					47
八	父と子の手紙……………	なが 永	い 井	たかし 隆		63
		なが 永	い 井	せい 誠	いち 一	
九	貨幣……………					71
十	電気と私たちの生活……………					78
十一	こいずみやくも 小泉八雲……………					85
十二	いなむらの火……………					94
十三	農 業……………					100
十四	にれの町……………	もも 百	た 田	そう 宗	じ 治	107
十五	くもの系……………	あくたがわ 芥川	りゆう 龍	の 之	すけ 介	118
十六	林 業……………					129
十七	夜明けの道……………					137
十八	太 陽……………					144
十九	お正月……………					152
二十	友だち……………					158
二十一	水産業……………					163
二十二	だるま……………	む 武者	しやのこう 小路	じ 実	あつ 篤	169

二十三	やしの実	しま 島	ざき 崎	とう 藤	そん 村	190
二十四	日本の政治					195
二十五	音					199
二十六	鋤 業					204
二十七	川と人間	い 伊	とう 藤	かず 和	あき 明	211
二十八	入学試験					222
二十九	日本の教育制度					234
三十	送別会					241
三十一	一留学生の見た日本					250
三十二	小僧の神様	し 志	が 賀	なお 直	や 哉	257

一 ^{アメ}雨ニモマケズ

みや ざわ けん じ
宮 沢 賢 治①

^{アメ}雨ニモマケズ②

^{カゼ}風ニモマケズ

^{ユキ}雪ニモ^{ナツ}夏ノ^{アツ}暑サニモマケヌ

^{シヨウブ}丈夫ナカラダヲモチ

^{ホク}欲ハナク

^{ケツ}決シテイカラズ

イツモシズカニワラッテイル

^{イチニチ}一日ニ^{ゲンマイヨシ}玄米四^{ハク}合③ ト

^{イソ}味噌④ ト^{スゴ}少シノ^{ヤサイ}野菜ヲタベ

アラユル⑤ コトラ

ジブンヲカンジョウニ^イ入レズニ⑥

ヨクミキキ⑦ シワカリ

ソシテワスレズ

^ノ野原ノ^{ハラ}松ノ^{マツ}林ノ^{ヘヤシ}陰ノ^{カゲ}

^{チイ}小サナ^{カヤ}萱ブキ⑧ ノ^{コヤ}小屋ニイテ

^{ヒガシ}東ニ^{ビョウキ}病氣ノ^{カンビョウ}コドモアレバ

^イ行ッテ^{カンビョウ}看病シテヤリ

^{ニン}西ニツカレタ^{ハハ}母アレバ

^イ行ッテ^{イネ}ソノ^{タバ}稲ノ^オ東ヲ負イ

^{ミナミ}南ニ^シ死ニソウナ⑨ 人アレバ

イ
行ッテコワガラナクテモイイトイイ
北^{キタ}ニケンカヤソショウ^⑩ ガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイイ
ヒデリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロ^⑪ アルキ
ミンナニデクノボー^⑫ トヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ^⑬
ソウイウモノニ
ワタシハ
ナリタイ

〔問 題〕

- (一) 最後の「ソウイウモノニワタシハナリタイ」の「ソウイウモノ」とはどんなものか。
- (二) 「サムサノナツ」とはどんなことだろう。またなぜそのときには「オロオロアルキ」なのだろう。
- (三) この詩をよく読んで、作者のいおうとしている^{ないよう}内容を、よくわかるようにふつうの文章に書きあらためてみなさい。
- (四) この詩にふさわしい読みかたをくふうして読んでみなさい。

〔注 釋〕

- ① 宮澤賢治 明治29年(1896)出生于日本岩手县, 家中经营当铺、

估衣铺。23岁毕业于盛冈高等农林学校。昭和8年(1933)9月逝世, 年仅38岁。在他那短暂的一生中, 曾经担任农学校教师五年, 退职后做指导教育农民的工作, 同时致力于诗歌、童话、戏剧的写作。大正13年(1924)自费出版处女作诗集《春天和阿修罗》和童话集《买卖兴隆的饭馆》。此外还写有《风又三郎》、《拉大提琴的戈什》、《银河铁道之夜》等作品。《不怕雨》是在作者死后从笔记本中发现的一首诗, 因此诗中的措词手法有点象草稿, 使人读后有一种清新愉快的感觉, 象是作者随心所欲、毫无造作地信笔写就的心声。

- ② ず 文语助动词“ぬ”的连用形, 相当于口语助动词“ない”的连用形“なく”。
- ③ 合 容量单位, 十合为一升。四合米约合一市斤。
- ④ 味噌 大酱、黄酱。
- ⑤ あらゆる 连体词。意思是“所有的”, “一切”。
- ⑥ かんじょうに入れる “かんじょう”本来是计算, 算账的意思。“かんじょうに入れる”的意思是“考虑(计算)在内”。“……ずに”是文语, 相当于口语的“ないで”。“じぶんをかんじょうに入れずに”的意思是: 不为自己打算。
- ⑦ みきき 意思是“见闻”, 可译成“耳闻目睹”“观察”。
- ⑧ 萱ぶき 茅茸。用茅草盖的屋顶。
- ⑨ 死にそうな “死に”是五段动词“死ぬ”的连用形, “そうな”是样态助动词“そうだ”的连体形。这里的意思是“看样子就要死了的……”, “病危的……”。
- ⑩ そしょう 诉讼, 打官司, 告状。
- ⑪ おろおろ 副词。形容不知所措、坐卧不安的样子。
- ⑫ でくのぼう (木偶の坊) 小木头人儿。喻人呆傻。
- ⑬ くにもされず “くにする”词组。意思是“苦恼”“讨厌”。本文用的是否定被动式。

〔参考译文〕

一 不 怕 雨

宫泽贤治

他，
不怕风，
不怕雨，
不怕夏日炎炎，
不怕冰天雪地。
他有健壮的身躯，
而没有贪欲，
也决不生气，
总是那样宁静地笑容可掬。
他一天吃上一斤粗米，
还有大酱和青菜少许。
对于周围的一切，
他留心观察、熟习，
而且不会忘记，
但心中却没有他自己。
他，住在野外松林中，
茅草小屋里。
东边，孩子病了，
他跑去护理；
西边，妈妈累了，
他去把那捆稻子背起；
南边，病人垂危，
他去安慰，不要害怕，别着急；

北边，有人吵架、打官司，
他去说：小事一段，何必，何必。
大地干旱，他伤心落泪；
夏日低温，他急得象热锅上的蚂蚁。
大家都说他象木头人一样呆傻，
不需要别人把他夸，
也不让人烦他。
我的做人榜样，
就是他！

二 野　　バ　　ラ

小 川 未 明^①

大きな^{おお}国^{くに}と、それより少し^{すこ}小さな^{ちい}国^{くに}とがとなりあつて②いました。とうざ、その二^{ふた}つの^{くに}国^{あいだ}の間^はにはなに^にごとも起^おこらず^{へいわ}平和^とでありました。

ここは都^{みやこ}から遠^{とお}い、国境^{こつぎよう}であります。そこには^{りようほう}両方^{こつぎよう}の^{くに}国^{へいたい}から、ただひとりづつ^はの^{けん}兵隊^{へい}が^は派遣^{けん}されて、^お国境^{くに}を^おさだめた^{せき}石碑^ひを守^{まも}っていました。大きな^{おお}国^{くに}の^{へい}兵士^しは^{ろうじん}老人^{ちい}でありました。そうして、小さな^{ちい}国^{くに}の^{へい}兵士^しは^{せい}青年^{ねん}でありました。

ふたりは石碑^{せき}の^ひたっている^{みぎ}右^{ひだり}と^{ばん}左^{ばん}に番^{ばん}をしていました。いたって③さびしい^{やま}山^{やま}でありました。そして、まれに^たしか、その^たへん^{ひと}を^{ひと}旅^みする^み人^みか^みげは^み見^みられ^みな^みかつた④のです。

はじめ、たがいに顔^{かお}を^し知^しりあ^あわ^あない^あ間^{あいだ}は、ふたりは^{てき}敵^みか^{かた}味^{かた}方^{かた}か^{かた}という^{かた}よう^{かた}な^{かた}感^{かん}じ^{かん}が^{かん}して、ろくろく⑤ものも^い言^いい^いま^いせ^いん^いで^いし^いた^いけ^いれ^いど、いつ^{いつ}し^{いつ}か^{いつ}⑥、ふたりは^{はなし}な^{はなし}か^{はなし}よ^{はなし}し^{はなし}に^{はなし}な^{はなし}つ^{はなし}て^{はなし}し^{はなし}ま^{はなし}い^{はなし}ま^{はなし}し^{はなし}た。ふたりは、ほかに^{はなし}話^{はなし}を^{はなし}する^{はなし}相^あ手^ても^てな^てく、たい^{はる}く^ひつ^ひで^ひあ^ひつ^ひた^ひた^ひから^ひで^ひあ^ひり^ひます。そして、春^{はる}の^{はる}日^ひは^ひな^ひが^ひく、う^うら^うら^うか^うに、頭^{あたま}の^う上^うに^う照^あり^あか^あが^あや^あい^あて^あい^ある^あから^あで^ああ^あり^あま^あし^あた。しょうど、国境^{こつぎよう}の^{こつぎよう}と^{こつぎよう}ころ^{こつぎよう}には、だれ^{だれ}が^{だれ}植^うえ^うた^うとい^うう

こともなく⑦，^{ひと}一かぶの^の野バラが，しげっていました。その花には，^{はな}朝早くからミツバチが^{あさはや}飛んできて集まっていた。そのころよい⑧^は羽音が，まだふたりの^はねむっているうちから，^{ゆめ}夢ごち⑨^{みみ}に耳に聞こえました。

「どれ，もう起きようか。あんなにミツバチが来ている。」と，ふたりは申し合わせたように^{もう}起きました。そして外へ出ると，はたして⑩，太陽は木のこずえの上^{げんき}に元気よくかがやいていました。

ふたりは岩まから出る^{いわ}清水で口をすすぎ，顔を洗いにまいますと，顔を^{かお}合わせました。

「やあ，おはよう。いい天気でございますな。」

「ほんとうにいい天気です。天気^{てんき}がいいと，^{きもち}気持ちがせいせいします⑪。」

ふたりは，そこでこんな立ち話をしました。たが^{あた}い^まに頭をあげて，あたりの景色^{けしき}をながめました。毎日見ている景色でも，新しい^{あた}感じを，見るたびに心にあたるものです。

青年^{せいねん}はさいしょ将棋^{しょうぎ}の歩みかたを知りませんでした。けれども老人^{ろうじん}について，それをおそわりましてから，このごろは，のどかな^{ひる}昼ごろには，ふたりは毎日^{まいにち}，向かいあつて将棋^{しょうぎ}をさし⑫ていました。

はじめのうちは，老人^{ろうじん}のほう^{つよ}がずっと強くて，こまを落^おとし⑬てさしていましたが，しまいには，あたりまえにさして，老人^{ろうじん}が負^まかされることもありました。

この青年^{せいねん}も、老人^{ろうじん}も、いた^{ひと}つていい人々でありまし^{ひと}た。ふたりとも正直^{しやうじき}で、親切^{しんせつ}でありました。ふたりは一^{いつ}生^{しょう}けんめいで、将棋盤^{しょうぎばん}の上^{うへ}で争^{あらそ}つても、心^{こころ}はうちとけ^いていました。

「やあ、これはおれの負^まけかいな。こうにげつづけては、苦^{くる}しくてかなわない。ほんとうの戦争^{せんそう}だったら、どんなだかしれん^⑩。」

と老人^{ろうじん}は言^いつて、大きな口^{くち}をあけて笑^{わら}いました。

青年^{せいねん}はまた、勝ち^かみ^⑩があるのでうれしそうな顔^{かお}つ^つきをして、一生^{いっしょう}けんめいに目^めをか^あが^あやかしなが^あら、相^{あい}手^ての王様^{おおさま}を追^おつていました。

小鳥^{ことり}はこずえ^{うえ}の上^{うへ}で、おもしろそうに歌^{うた}つていま^いし^した。白^{しろ}いバラの花^{はな}からは、よいかお^おり^おを送^{おく}つてきま^いし^した。

冬^{ふゆ}は、やはりその国^{くに}にもあ^あつたのです。寒^{さむ}くなると老人^{ろうじん}は、南^{みなみ}の方^{ほう}をこ^こい^いしが^がり^りま^まし^した。

その方^{ほう}には、せがれや孫^{まご}が住^すんでいま^いし^した。

「早^{はや}く、ひまをもら^{もら}つ^⑩て帰^{かえ}りたいものだ。」

と、老人^{ろうじん}は言^いいました。

「あなたがお帰^{かえ}りにな^しれば、知^しらぬ人^{ひと}が、かわりに来^くるでしょう。やはり親^{しん}切^{せつ}な、やさしい人^{ひと}ならいいが、敵^{てき}、味^み方^{かた}、というよう^{かん}な考^もえ^もを持^もつた人^{ひと}だとこま^こまります。どうか、もうしば^{はる}らくい^いてくだ^{くだ}さい。そのう^{はる}ちに春^{はる}がき^きます。」

と、青年^{せいねん}は言^いいました。

やがて冬^{ふゆ}が去^さって、また春^{はる}となりました。ちやうど
そのころ、この二^{ふた}つの国^{くに}は、何かの利益^{りえき}問題^{もんだい}から、戦^{せん}
争^{そう}を始めました。そうしますと、これまで毎日^{まいにち}、なか
むつまじくくらしていたふたりは、敵^{てき}、味方^{みかた}のあいだ
がらになったのです。それがいかにも、ふしぎなこと
に思^{おも}われました。

「さあ、おまえさんとわたしは、きょうからかたきど
うしになったのだ。わたしはこんなにおいぼれ^⑦で
いても少^{しょう}佐^さだから、わたしの首^{くび}を持^もって行^いけば、
あなたは出^{しゅつ}世^せができる。だから殺^{ころ}してください。」
と、老人^{ろうじん}は言^いいました。

これを聞^きくと、青年^{せいねん}は、あきれ顔^{かお}をして、
「何を言^いわれますか。どうしてわたしとあなたとが、
かたきどうしでしょう。わたしの敵^{てき}は、ほかにな
ければなりません。戦争^{せんそう}はずっと北^{きた}の方^{ほう}でひらか
れています。わたしは、そこへ行^いって戦^{たたか}います。」
と青年^{せいねん}は言^いい残^{のこ}して、去^さってしまいました。

国境^{こくきよう}には、ただひとり老人^{ろうじん}だけが残^{のこ}されました。青
年^{ねん}のいなくなった日^ひから、老人^{ろうじん}はぼうぜんとして日^ひを
送^{おく}りました。野^のバラの花^{はな}が咲^さいて、ミツバチは、日^ひが
あがると、くれるところまで群^{むら}がっています。今^{いま}、戦争^{せんそう}
はずっと遠^{とお}くでしているので、たとい耳^{みみ}をすまし^⑧て
も、空^{そら}をながめても、鉄砲^{てつぱう}の音^{おと}も聞^きこえなければ、黒^{くろ}
いけむりのかげすら見^みられなかつたのであります。老
人^{じん}は、その日^ひから、青年^{せいねん}の身^みのうえを案^{あん}じていました。

日はこうしてたちました。

ある日のこと、そこを旅人が通りました。老人は戦争について、どうなったかとたずねました。すると、旅人は、小さな国が負けて、その国の兵士はみなごろしになって⑩、戦争は終わったということを告げました。

老人は、そんなら青年も死んだのではないかと思いましたが。そんなことを気にかけ⑪ながら、石碑のいしづえにこしをかけて、うつむいていますと、いつか知らず、うとうとといねむりをしました。かなたから、おおぜいの人の来るけはいがしました。見ると、一列の軍隊でありました。そして、馬に乗ってそれを指揮するのは、かの青年でありました。その軍隊はきわめてせいしゆくで声ひとつたてません。やがて老人の前を通るとき、青年は黙礼をして、バラの花をかいだのでありました。

老人は何かものを言おうとすると、目がさめました。それはまったく夢であつたのです。それからひと月ばかりしますと、野バラがかれてしまいました。その年の秋、老人は南の方へひまをもらって帰りました。

〔漢字の熟語〕

ろうじん
老人
せいねん
青年
りえき
利益

ろうがんきよう
老眼鏡
せいねんだん
青年団
ゆうえき
有益

ろうねん
老年
せいしゆん
青春時代
むえき
無益
ようろういん
養老院
じだい
益虫